

新鋭こころシリーズ 8

林田悠来詩集『晴れ渡る空の下に』

佐相 憲一

一

詩集タイトル『晴れ渡る空の下に』とみず色の表紙は、願いであり、逆説であり、志である。

〈希望〉という字はどこへ消えたのか

明日、という字はどこに消えたのか

薄暗い闇夜を夜明けの見えない中

人々は街をさまよい歩く〉

表紙にある詩「共に」の引用だ。(人々)の中には作者自身も含まれている。格差社会と孤立社会だ。

つまり、現在、作者も社会も、「晴れ渡る空の下に」はいないということになる。何とかして自分も社会も前へすすみたい、そんな願いがこのタイトルには込められているのだ。

詩集は恋から始まって、志に終わる。途中には、自然や家族とのふれあいがあり、社会批評があり、人生の迷いがあり、交友があり、被災地の刻印と自然エネルギーへの期待があり、旅がある。

二

詩集の中で、作者は自分自身が精神病になつて精神病棟に入ったことを明かしている。これはこの詩集理解のための大きなポイントであろう。作者はどんだ底を見た人である。発狂してすべてが空しくなつて、精神病棟で治療を受け、薬とつきあいながら、何とか心の健康を回復し、しかし今も将来も、医学の力を借りながらコントロールして、過敏なほど敏感な心の問題とつきあつていかななくてはならない、そういう人だ。

第二章の作品「精神病棟24時」を全篇引用しよう。

精神病棟24時

朝6時に起床

7時半には朝食

丁寧に作られた食事はわずか十分足らずで空になる

毎回食後は薬を飲むのに並ぶ

躁や鬱、統合失調症、解離性障害、

様々な人たちがいる

月、水、金の午前中には風呂に入る

服が溜まると洗濯をする

何故か3階の比較的軽症状の軽い人が先に入るように

2階の入り口にはカギがかかる

その後は喫煙室で談笑したり

ここは概して優しい人が多い

そう、ここは心に傷を負った人のオアシスなのだ

*OTは作業療法のことを言う。

精神病棟の様子がリアルである。この詩を初めて読ませてもらった時、正直言って、私は驚いた。自分自身が大変なのに、この人は精神病棟のさまざまな人々をしっかりと見つめて、それを客観的に詩に表現しているのだ。もちろん、これを書いたのは、治療がうまくいって、退院も近くなった頃であろう。それにしても、こうして作品に表現して刻印することとは、ほとんどの患者にはできないことであろう。この詩のおかげで、私たちは、現代の精神病棟の日常の様子をリアルに感じることができると言える。私はこの詩は、作者の代表作の一つになるだろうと確信している。

なぜ、そんなことができたのか。作者の来歴を聞いて、私は納得した。作者は記者だったのである。リサイクル関係の専門家、その関係の業界紙に勤めていた。ゴミのリサイクルという問題は、広く現代社会の根本問題であり、関連してさまざまな社会側面を知っていなければ動まらないだろう。作者はかつて、国会議員たちを相手にリサイクルの講演をしたこともあるという。

この人は記者の眼をもっているのだ。だから、自らが精神病棟で苦しんでいる時も、常に周囲のみんなの状況が眼に入り、病棟の様子全体を観察してしまうのだ。そして、それを書いて

ベッドに入つて横たわる者もいる

広い食堂を歩き廻っている者もいる

午前、午後も読書三昧

昼食は12時でご飯の前には必ずテレビを消す

あらかたの人がご飯を食べ終わるとすぐにテレビをつける

先に見ていた人がチャンネル権を得るが

後から来た人が勝手にチャンネルを変えてしまう場合もある

る

午後はOT^{*}に行つてオセロゲームや将棋、折り紙などをす

る

1週間に1度食事のグループがある

食事の献立を考え次の週に食事をつくる

毎週1回グループというのがあり好きなことを勝手にしや

べる

午後にコーヒーとお茶が飲めるお茶会というものもある

差し入れのお菓子を食べながら歓談する

午前と午後の開放時間には3階のみ扉が開放され買い物物が

自由になる

2階の人は看護婦の付き添いで買い物ツアーをやるそうだが

週に1度カラオケマイクを使って歌を歌つたり

2週に一遍卓球をしたりする

土曜日の夜は生のピアノ演奏によるカラオケだ

OTとそのときは男女混合となる

6時の夕食後わずか2時間足らずで眠剤の時間になる

夜中は一時間ごとに懐中電灯で見回りに来る

しまうのだ。

この詩「精神病棟24時」を詩集の冒頭にもつてこようと最初私は考えた。それだけ力のある詩だからだ。しかし、熟考の末、それはやめた。作者も含めて、この現代日本社会の中で今、多くの方々が精神病に苦しんでいる。世の偏見にもさらされて、人によっては家庭までも崩壊して、それまでの仕事を辞めざるをえなかつたりするなど、大変つらい目にあっているだろう。治療が第一なのに、経済苦で入院できない人もいるだろう。また、精神病にまではいったってはないが、鬱気味の状態や、さまざまな心の問題に苦しむ無数の人々がいることはよく知られている。日本という国家は、北欧などくらべると社会保障や福祉が貧困である。社会生活の場も、受け入れる態勢が整っていないし、政治家やマスコミなどがまき散らして巷には「自己責任論」なるものが平気な顔でのさばっているのである。

そんな現状だから、この詩作品はいつそう切実なのだが、これを詩集トップにもつてきて「どうだ、精神病だぞ」とことさらに強調して、まるでそれがウリモノであるかのように見えてしまうのは、作者の伝えようとしているニュアンスとずれてくると私は感じた。

むしろ、働いて、多感に恋をして、家族を思いやり、友を思いやり、社会問題にとりくみ、旅を愛する、一人のまだ老いてはいない人間が、現代生活の渦の中で、精神病にもかかり、それをしっかりと受けとめて、ひたむきに生き、日々連帯し、たたかっているという、詩集全体の中のポイントのひとつとして収録したかったのである。

三

章ごとに、詩集をみていこう。

第I章「季節の結び目」は、作者の中の詩的な優しさが発揮された味わい深い詩群である。冒頭の詩「コスモスの花」を用しよう。

コスモスの花

東京郊外の広い公園に
コスモスの花が広がる
黄色やピンクや赤の絨毯のように

その花びらの美しさに魅かれて
君が写真を撮る
自らの美しさを振り撒いて咲く
コスモスの花には
ミツバチが群がる
そのミツバチが受粉させ
花は種を作る
いつからそんな命の連携の営みが始まったのか
そんなことに心をとらわれながら
写真を撮る君の姿を

じつと眺めている

恋愛の日々からの作品であろう。作者は愛する人を優しく見つめ、見守っている。「君」は花を写真に撮っている。コスモスだ。作者の眼はコスモスを通じてミツバチへと移動する。昆虫と花の、人間の性を連想させる不思議な（命の連携の営み）だ。作者はそれが（いつから）（始まったのか）と驚嘆している。

一人の人を愛することで、地球自然の長い生命連鎖の美しさを愛する。何気なく書かれてはいるが、この関連と飛躍は作者が詩人の眼をもっていることを物語っているだろう。（「郊外」の公園でコスモスとミツバチを見つめながら微笑みあうカップルの光景と、命の不思議にふれた作者の淡々とした抒情が新鮮な作品だ。

ほかに、「金色のカーテン」「秋の夜」「大晦日」「鳥」「愛の華」「目黒川の桜」「黒目川の桜」「宇宙の星」「燕のように」「広葉樹」と、第I章には作者の自然観・人間観が新鮮に反映した、すぐれて優しい詩が収録されている。

作者の人柄からくる持ち味が、味わい深い詩情で淡々と伝わってくるので、多くの一般の読者に親しまれ、共感を呼ぶ詩群ではなからうか。

四

第II章「日食と叫び」は、一転して、シビアな詩群である。これもまた作者の特長である、社会批評性と精神の叫びが前面に出ている。

作品「日食」「オセロゲーム」はドキリとさせる風刺が利いている。今、本当は現代詩こそが広く世に表現してほしいもの、それが難解になつて閉鎖的な現代詩の現状にはなかなか期待できない中で、元記者のこの詩人がわかりやすい言葉で表現してくれた。（世の中の裏返し）、それはどこへ行きつくのか。意地悪なほど冷静に観察する（オセロゲーム）は、読みようによってはこの間の「二大政党制」の怪しさなども連想させて、突き刺さっている。

そして、第II章は先ほど述べた「精神病棟24時」を経て、「老人」「そううつ病」「ただ前に」「散歩」「ヒント」「歩み続けよう」「悠々と」「年賀詩」「晴れ渡る空の下に」と続く。精神病棟で知り合った老人との交流や、苦しみながらも前を向いて行き続けようという自分自身の葛藤や願い、心ある人々との社会的連帯のメッセージなどが切実に書かれている。

第I章の陽光に対して、第II章の闇夜。ともに、作者の詩世界である。

五

第III章「3・11」は、昨年二〇一一年三月十一日の東日本大震災と福島原発の深刻な事態を受けた作品群だが、ここにも記

者経験のある作者の持ち味が出ている。彼は被災地にも出かけた。

鶴見線

「溢れた海」「モアイ像」「花火」「北リアス線開通」の四篇は、被災地の状況を象徴する情景を切り取って、それぞれをくつきりと表現している。その切り取り方は、確かにジャーナリストの仕事にもつながる特長だ。

また、「夜明け」はそんな状況からはやく現地の人々のくらしが好転してほしいという作者の願いの詩である。

「グリーン風の風力発電」「丸い月」の太陽光、と作者は自然エネルギーの方向へと詩を向ける。

六

第四章「旅と列島」は、自由な旅の詩群である。各地の情景や作者の感動がほっとさせるが、ここにも、よく読むと、作者が観光モードに浸っているだけでなく、各地で大きな問題を身近に考察していることが分かる。

工業社会の歴史の痕跡、環境問題に関するとりくみや自然の中の発見・感慨、反戦平和、生き方、といった要素が、作品「鶴見線」「神保町の一角で」「台風」「マンゲロープ」「由布島」「花の浮島」「夢の浮島」「宮島そして広島」「横浜の海」の中に盛り込まれている。

ある雨の日の京浜工業地帯のローカル線に乗って行って見た情景が印象深い「鶴見線」を全篇引用しよう。

鶴見駅から出ているローカル線
昔は工業地帯でにぎわった街並みも
今では新しいマンションに埋め尽くされている
それでも駅を降りるとさびれた街の様子が
当時のにぎわいを垣間見せてくれる
梅雨特有の灰色の空と灰色の海は見分けがつかないほど
色が似ていた
そこには工業地帯の残骸の船が横たわり
遠くには橋がかかっていた
空からは梅雨の雨が舞い降りていた
それでも海を見に人はやってくるのだった
それは
太古の昔に人間が海に棲んでいたことを
懐かしんでいるのかも知れなかった

七

こうして林田悠菜さんの第三詩集は、最後の第V章「共に」に入る。十八ページに及ぶ長詩「共に」だけで一章を構成した。

淡々とした短い刻印や優しい詩情を持ち味とした作者の詩世界であるが、もうひとつの挑戦にご案内したい。

全篇「志」といった感じのこの長詩は、思いをストレートに語るスタイルから、賛否両論出るだろうことが予想される。それでいいと思う。

この一篇が気に入らない方々も、この詩集のほかのところの詩世界に大いに共感していただけたなら、うれしい。

だが、作者にとって初めての挑戦であるこの長詩は、どうしても収録しておきたかった。作者もそうだし、編集者の私もそうであった。荒削りのこの進るメッセージの全体に、作者の志が生きているからだ。

志。

それは本来、詩にとつてとても大事なものである。ユゴーも、ホイットマンも、プーシキンも、単に詩文学表現がうまくいっただけでなく、世の中に積極的に関与する志があった。メッセージ性があった。日本では、とかく社会性の強い詩に風当たりが強く、あいまいに流されやすい国民性を反映しているが、古今東西、詩の根源のひとつには、他者への強く広い伝達性があるのだ。そこでは、人間の生き方というものが問われてくる。

林田悠菜さんは、これまでの彼の詩世界の継続に加えて、この作品によって、そうした世界の詩の大道のスタート地点にも立ったと言える。彼にはそうした視野がある。

この詩「共に」には、初めて書いた長詩ゆえのとまどいもあり、詩作品としては表現や形式の工夫などにぎこちない感じがあるが、混迷するこの世の中にあつて、精神病院にも通いなが

ら、ひたむきに生きてきた人の、本当の心がある。自分自身や今の時代を共に生きる人たちへのメッセージがある。

そこに、私は胸をうたれた。

〈私は生涯

詩を書き続けることだろう

人々の幸福を

ひたすら願ひ続けて〉

という終連の四行。この詩人の今後にも注目だ。

記念碑的なこの進りの長詩「共に」の試みで、この詩集を終える。

八

林田悠菜さんの『晴れ渡る空の下に』の刊行を喜びたい。刊行されてまだ間もないが、早くもうれしい反響がある。

心の病とつきあっているという方々や、今の世の中で自信を失いかけていた若い方々から「勇気づけられた」「自分ももんもんとしていたので代弁してくれたようで良かった」「自分も詩を書いてみたくなった」などの声。

今を生きる人の切実な気持ちがつまったこの詩集が、今を生きる広範な人々の心に響くといい。